



# 日本協会ニュース 2019

CISVは、より公正で平和な世界に向けて、意欲的に行動する人を育てます。

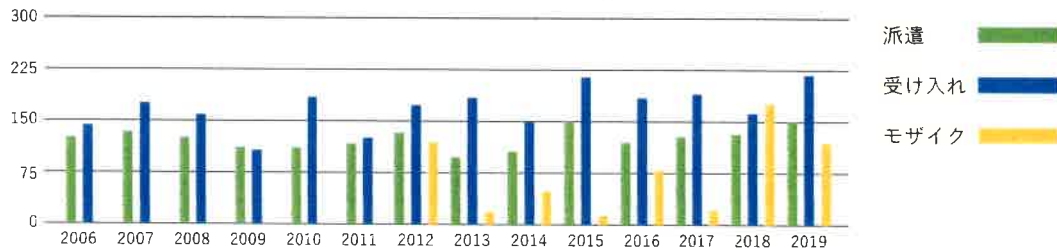
CISV educates and inspires action for a more just and peaceful world.

公益社団法人CISV日本協会の2019年度（2018年10月1日～2019年9月30日）の全ての事業は、無事に滞りなく終了しました。

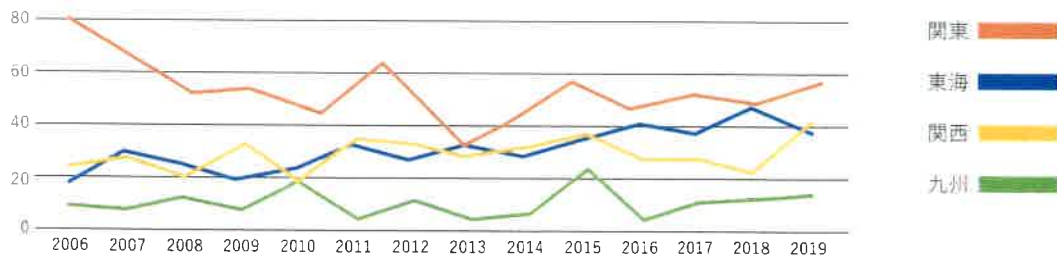
冬には、ビレッジ、ユースミーティング、IPPに計40名を派遣し、ヤンゴン市でCISVミャンマーとIPPを共催しました。夏には、ビレッジ、ステップアップ、セミナーキャンプ、ユースミーティング、IPP、国際JB会議に計113名を派遣し、関東支部でステップアップとIPP（福島）、関西支部でビレッジ、東海支部と九州支部でユースミーティングを開催して222名を受け入れました。

この他JB部会が東アジアジュニア会議（TEA）を東京で実施。ひと夏に6つのプログラムを開催したのは日本協会設立以降初めての快挙です。さらに国際承認を受けたモザイク（コミュニティ活動）を関東支部で3件、関西支部で1件開催し、累計で122名の参加者を得ました。

派遣数と受入数の変遷



支部別派遣者数の変遷



以上により、2019年度のCISV日本協会の総参加者は495名となり、現在CISV国際で推進されている「2030年までにCISVの参加者数を倍増しよう」という目標にも沿ったものとなっています。

4週間のプログラムのためのリーダーとスタッフの募集、日本大会開催場所の確保等、解決困難な課題は多く、また、日本全体に内向き志向が高まる中で、このように活発な活動を続けられるのも、1861名の正会員と472名の準会員の皆さんの献身的なボランティア活動と、会員、同窓会、賛助企業の皆様より賜りましたご寄附のおかげと感謝申し上げます。

尚、現在CISV国際では、7つの教育プログラムの見直しが進んでおり、ビレッジを23日間にするか、インターチェンジを廃止するか、ユースミーティングは12～13歳だけの2週間プログラムにするか、大人のプログラムは廃止するか、など大胆な改革案が議論されています。興味のある方は、国際のウェブページをご覧ください。

来夏には日本も一票投じますので、ご意見を国際理事にお寄せください。

関西支部ビレッジ開催報告  
「最高の夏休み」

2019年7月28日～8月24日 大阪府

ディレクター 尾崎 侑亮



今回3回目のCISVキャンプにキャンプディレクターとして参加しました。過去にスタッフ、リーダーを経験していたためある程度、どのような流れになるのかわかっていましたがやはり大変。キャンプが始まるまえから毎週ミーティングし、みんなでああでもない、こうでもない、試行錯誤し計画を立て、あらゆる場面を想定しました。

準備は万端、いざキャンプが始まりました。まずリーダー10名、JC6名を迎え入れました。今回はカナダ、ブラジル、フランス、ドイツ、イタリア、日本、メキシコ、ノルウェー、フィリピン、アメリカ、JCは日本、オランダ、イスラエル、イギリス、アメリカから全16名、13カ国から様々な考え方や経験を持った人が集まりました。

最初の三日間は、まず大人たちだけのオリエンテーション、自己紹介から始まり、自分の国のことや今までしてきた経験を話し合いました。でもやっぱり一番盛り上がるのは子どもの話。自分が連れてきた子どもたちはどんな子なのか、みんなで何時間も話し合いました。その中で僕たちの仲も良くなりました。

そして、キッズのキャンプイン。初めて会う違う国籍の人とすぐ仲良くなるのを見て改めてCISVの良さを実感しました。スタッフも準備や、いろいろなことを想定していましたがやはりキャンプが始まれば想定外のことがたくさん起きました。そこで臨機応変さや知識がいかに大切かを知ることができ、とてもいい勉強に僕自身も気付かされました。

またそんな想定外のことが起きた時、瞬時に助けてくれたのが大会委員会の方々でした。僕たちスタッフにいつも気を配ってくれて、困っている時は助けてくれているのを感じて、僕たちは周りにも恵まれているのだと感じました。キッズにも今キャンプができていないのは見えないところで頑張っている人がいるからだよと伝えると、自ら給食の係りの方に「ありがとう」と日本語で伝えているのを見て感激しました。言語も文化も環境も違う日本に来て様々な問題、時にはすれ違いもありましたが、話し合いで合意し同じ方向に一緒に向かっていけるということは本当に素晴らしいことだと実感しました。

それぞれの国に帰る前日、全64名で一夜を過ごし、とても感動的で全員でたくさん泣きました。いろいろな経験した1ヶ月で帰りたくない子どもから聞かされると、スタッフそしてディレクターとして最低限の仕事を果たすことができたのかなと安心しました。長いようで短い1ヶ月でしたが子どもたちにとっても大人たちにとっても最高の1ヶ月だったと思います。

関東支部ステップアップ開催報告

「Shape of Space」

2019年8月5日～31日 長野県

ディレクター 高橋 香南子



2019年8月5～31日、合計9カ国、参加者45人、スタッフ9人の総勢54人によってステップアップが国立信州高遠青少年自然の家にて開催されました。

スタッフはほぼCISV経験が無く、参加期間もバラバラのメンバーによって構成されており、終始手探り状態ではありましたが、大きな怪我や問題もなく、何とか無事に終える事が出来ました。

今回のテーマは「Shape of Space」、参加者全員がこのキャンプをきっかけに、様々な葛藤に向き合い、宇宙の様に無限に可能性を広げて欲しい、自分なりの宇宙の形を見つけて欲しい、そんな思いを込めました。全員の参加者がいつもとは異なる環境、文化のもとで暮らす事に様々な葛藤を感じながらも、お互いの絆を深め合い、最後には涙を流しながら別れを惜しむ関係になる事が出来、参加者一人一人の成長を感じる事が出来ました。

今回、ステップアップの特徴でもあるLocal Impact Dayには、EXILEのUSAさん、世界一周の経験があり、東日本大震災の被災者でもある菅原さんのゲスト2名をお呼びしました。ダンス言語を使った交流と、世界の問題を体感するという全く異なるタイプの経験をする事が出来、全員とても楽しみながら積極的に参加していたのが印象的でした。

準備期間も含め、ここまでかなり長い道のりではありましたが、想像のつかない光景が現実となり、ハプニングもありつつも、無事にキャンプを終え、とても貴重な経験をする事が出来ました。又、最後にはなりますが、今回のキャンプは、ホストファミリーの受入をして下さった方々、サポートに来て下さった方々、大会委員会の方々、支えて下さった全ての方々のお力無しには無事に終える事は出来なかったと思います。この場をお借りして皆様に感謝申し上げます。長い間にわたる様々なサポートを、ありがとうございました。

## 九州支部ユースミーティング開催報告

## 「Buon Appetito Conflitto」

2019年8月9日～20日 福岡県

ディレクター そん・さんひょん



台風（8～10号）と共に怪我なし、病気なし、ラブなしのSpaghetti Youth Meetingは初めて北九州で行われました。初めてのDirectorとして「人生なんとかなる、なんとかする」精神で挑みました。蓋を開けてみたら、参加国はインド、インドネシア、ベトナム、中国そして日本といったオールアジア。APRW繋がりですべてのリーダーと一部のユースは私を知っていて、大会委員の仕事の速さ、施設の神対応、台風による被害ほぼなしで最後まで無事に終わることができました。

キャンプテーマである「スパゲッティ」のアイデアはフィリピンのJollibeeとぐちゃぐちゃなソースコードを意味するプログラミング業界の用語から用いました。Tシャツの発注はフィリピンのセブチャプターに発注し地味にコラボレーションを意識してみました。カルチュラルアクティビティでは各国の料理を教えてもらったことで人生の楽しみが一つ増えた気がします。8日間の短い期間でしたが、それぞれの一日はビレッジと変わらない濃厚な一日でした。それを支えたのは差し入れのチオビタとコーヒーと各国のお菓子、STC部会によるディレクター研修とスタッフの研修、スタッフとリーダーと大会委員とホストファミリーと関係者の協力だと思います。本当にかたじけないです。だんだん。

## 東海支部ユースミーティング開催報告

## 「Energizer Youth Meeting」

2019年8月11日～18日 愛知県

ディレクター 伊藤 翔生



8月11～18日、東海支部お馴染みのさもと館に中国・日本(九州)・モンゴル・タイ・アメリカのデリゲーションが集まり、Energizer Youth Meetingが開催されました。初めてのディレクターとして不安な気持ちもありましたが、話が脱線しがちな仲の良すぎるスタッフメンバーに支えられ、キャンプを行うことができました。

とても暑い日が続き、外でのアクティビティは多くはできなかったですが、病気や怪我もなく笑顔いっぱいの8日間になりました。それぞれ自分の国ならではの問題とその解決策を紹介する時間では、どのデリゲーションも素晴らしい劇を用意してくれていたたり、キャンプ中間に行ったキャンプミーティングでは、ユース達自身で、キャンプで起きている問題を出して、より良く生活していくために必要なルールを作っていたりと、ユースミーティングだからそのビレッジから成長したユースの姿を見ることができました。最後になりましたが、このEnergizer Youth Meetingを無事に終わることができたのは、キャンプに携わっていただいた皆様のおかげだと思っています。ご協力いただき、本当にありがとうございました。

関東支部IPP開催報告

「ふくしま・それぞれの物語」

2019年8月11日～24日 福島県飯舘村

ディレクター 木村 緑



2年前から手探りで準備を始めたIPPがとうとうこの夏に開催された。場所は福島県飯舘村。2011年3月の福島第一原子力発電所の事故による影響で村民は6年間避難生活を続けた後に再生が始まったばかりの村である。

今回のIPPのテーマは「Stories of Fukushima, Exploring Stigma and Inspiring Actions」。世界から見る原発事故のあった福島のイメージと実際の福島県飯舘村はどうだろう。震災から8年の間には飯舘村にはいろいろな物語（ストーリー）がある、それを実際に世界からくる参加者に知って欲しいという思いがあった。

2週間のプログラムで、前半1週間は村内を周って現状を学び、盆踊りに参加して村の文化に触れ、参加者同士のTheme based activities(TBA)でお互いに学ぶ、後半はその上で参加者は自ら考えて活動するという構成で臨んだ。そして前半と後半の間の週末には、飯舘村の村民宅に1泊2日のホームステイを組み入れた。通訳のボランティアと共に6つの家庭に分かれた参加者たちは、農作業を手伝い、バーベキューを楽しみながらも、各家庭の震災からこれまでの飯舘村への思い、子や孫への思い、農業や牧畜を再生する決意に触れ、とても深い交流ができたようだ。

後半は参加者主体の活動へ。参加者の心に強く響いたホームステイで出会った人々の思いをビデオインタビューで世界へ発信しよう、FacebookなどのSNSで村の人々の様子を発信しよう、地区の運営する新しい試みのキャンプサイトに村民と一緒に丸太でベンチを作ろう、と3つに分かれ始まった。タイトなスケジュールの中、夜遅くまで楽しくも真剣に取り組み、最後に開いた交流会ではビデオをお披露目することができた。Facebookでは「Stories of litate」として参加者が発信し始めている。ベンチにはCISVの名を刻んだ。

IPPは地域の課題に協力団体とともに取り組むというプログラムであるが、今回は飯舘村の人々と深く交流したことで地域の課題に参加者なりの活動で取り組んでいったと思う。そして参加者の心に「あのホームステイのお父さんお母さんのいる飯舘村」という具体的なイメージができたのではないか。このような交流が、福島の問題を他人事とせず、自分たちの問題でもあると考えるきっかけとなれば、とても嬉しい。

このIPPの開催にあたってご協力くださった飯舘村役場、ふくしま再生の会、関口グローバル研究会の皆様、そしてサポートしてくれた仲間と素晴らしい参加者に深く感謝している。

TEA（東アジアJB会議）開催報告  
「TEA2019」

2019年8月15日～19日 東京

Sr.NJR 武藤 有為、 Jr.NJR 川田 歩



8月15日から19日に東京のオリンピックセンターでTEAが開催されました！TEAとは、Teamwork of East Asiaの略で、特に東アジア地域のJBのためのワークショップです。コーディネーターには日本のSr.NJRである武藤有為、プランナーには日本からJr.NJRである川田歩と関東支部委員長である塩沢晃平がホームスタッフと兼任、また香港とモンゴルから1名ずつの5名で行い、参加者は日本、香港、モンゴル、ベトナム、ミャンマー、ロシア、フランスから集まった合計31名となりました。

TEAは例年2月または3月に開催されていましたが、今回は試験的に8月に行い、2017年以来日本で開催されました。今回のテーマは"TEAm building"として、参加国のJB間のつながりを強化し、東アジア地域のJB活動をより良いものにしたという目標をもって行いました。

プランナーによるセッションではチーム内の諍いの原因を話し合ったり、JBとしての基礎的な知識やプランニングの方法を伝えたりしました。そのあと、参加者でプランニンググループを作ってプランニングをして3日目のアクティビティを全て参加者に任せる、といったことを行うことで参加者同士が国の枠組を越えて協力することができました。さらに、各国の国内のJBの強みや弱みなども共有し、国内の状況が全く異なる国もあったためそれぞれの国が刺激を受け自国に還元できるものを探す良い機会になりました。また、4日目にはエクスカージョンで原宿エリアに出かけ、夜はナショナルナイトのような形で各国の参加者によるパフォーマンスを披露するなど、交流を深めました。

また、TEAという東アジア地域のワークショップをもう一度見直すことができました。近年参加者が東アジア地域からあまり集まらず、その内容や存在意義自体も疑問視されることが多くなってきた為、今回のTEAでその目的や開催意義などを参加者と討議して再確認しました。私たちにとって何より喜ばしかったことはこれからのTEAを話し合う場でプランナーからの「TEAは存続していくべきか」という問いに全ての参加者が「TEAは必要」だと答え、東アジア地域の強い結束を感じる事ができました。今回のTEAでのアクティビティを通して参加者は国を越えたネイバーフッドという東アジア地域の枠組の仲間であるという意識を高めることが出来たと思います。

そして最後になりましたが、今回は日本開催ということで日本協会の皆さまやホストファミリーを受け入れてくださったご家族など様々な方にご協力いただきました。TEA開催に関わって頂いた全ての方へこの場を借りて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

ミャンマーIPP開催報告

「Overcoming Boundaries」

2018年12月22日～2019年1月4日 ヤンゴン

ディレクター 松尾 早恵、 スタッフ 西恵 里奈



2018年12月22日?2019年1月4日までCISV日本・ミャンマー共催のIPPに、日本よりスタッフ2名、参加者3名が派遣された。

スタッフとしての派遣が決まった松尾早恵と西恵里奈は、まずミャンマーという国について勉強することから始めた。現地に住んで23年になるCISV Myanmar兼Partner Organizerの岩崎ひとみさんの力もお借りして、プログラムを組み立てる中でミャンマーについてたくさんのことを教えてもらった。また日本で本を読んだり、映画を見たりと、知れば知るほど複雑で奥深いミャンマーという国に魅了された。

今回のIPPのテーマは「Overcoming Boundaries」。このテーマにも複雑で奥深いスタッフの意図が隠れている。ミャンマーの「boundaries」というと今国際的にも話題となっている民族問題に終始しがちであるが、今回のIPPでは、よりテーマを身近に感じてもらうため、自分と他者の間に存在する「boundaries」（偏見やステレオタイプなど）、また自分自身のなかに存在する「boundaries」（自己肯定感や自信など）へと昇華して行って欲しいという思いを込めた。テーマについては、IPPのプログラムの特徴の一つである、テーマを各国のコンテキストに落とし込み、参加者全員で考えるtheme based activity (TBA)を通して、各国そしてミャンマーの実情を踏まえ考え学んだ。

プログラムの中盤には、IPPの特徴の2つ目である現地の他団体と協働で実施するHands-on projectの現場として、ミャンマーでは珍しい多民族の子供達が生産する児童養護施設を訪れた。300名を超える児童にCISVアクティビティを通して彼らの持つboundariesを乗り越えてもらうことを目的とした訪問であった。しかし、彼らと日々生活する中で自分自身もつ「boundaries」について気づく機会や、また自身の日本での生活を思い返すきっかけにもなった。

CISVのプログラムに参加することは、様々な考え視点の人の出会うことで自分の「boundaries」を徐々に取り除くことのように思う。



**CISV日本協会ニュース第12号**

発行日：2019年12月8日

編集責任者：鈴木 勇貴

発行：公益社団法人CISV日本協会 〒162-0822 東京都新宿区下宮比町2-28-218

Tel：03-5261-8560

Fax：03-5261-8540

Email：japan@cisv.org

LINE ID: @cisv

公式ホームページ: [www.cisv.jp](http://www.cisv.jp)

Facebook： [www.facebook.com/cisvjapan](https://www.facebook.com/cisvjapan)